

「幻の江の島の灯台(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

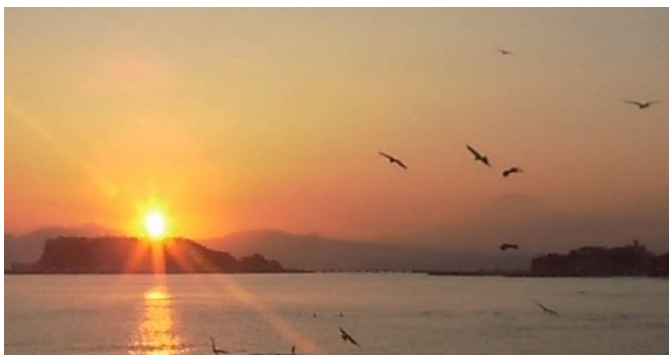
田中 千尋 Chihiro Tanaka

夕方に帰宅後、私は江の島に「行く」ことにした。「行く」といっても、自室の中での話だ。インターネットを使った動画配信技術の向上で、日本---いや、世界各地の現在の風景(ライブカメラ)をパソコンやスマホで見ることができる。私も、浅間山やスウェーデンのオーロラ生中継を16年も前から実施している。江の島のライブカメラもあるにちがいない。

一番見たかったのは、海岸から見た江の島の夕暮れだ。できれば富士山のシルエットも見たい。そういう画のライブカメラは意外にも簡単に見つかった。



実にすばらしい。スマホでも見られるが、パソコンでは全画面で、しかも動画(現在の様子)が見られる。ちょうど江の島(左側の島影)の真上に夕日が沈もうとしているところではないか。これこそまさに、6年生の子どもたちと眺めたいと思っていた風景だ。



夕日は、ドンピシャで江の島の島影に沈んでいく。まるでこういう場所を狙って、カメラを設置したようだ。しかし太陽の沈む位置(黄道の方位角)は季節によって変化する。こうした景色は、一年のうちにも何度もあることではないだろう。不思議なことに、日没と

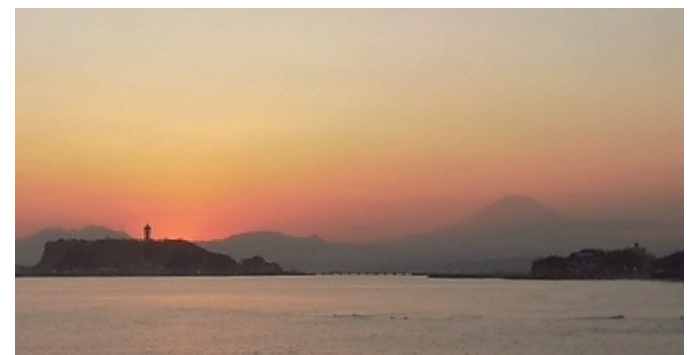
同時に、たくさんの鳥が舞い始めた。これはトビ(トンビ)の群れにちがいない。このトビは、江の島の片瀬海岸で観光客の食べ物を奪う「盗賊」である。埴(ねぐら)はどこなのか知らないが、そこへ帰るのだろう。



私はパソコンの画面を観察しながら、画に描いておいた。これもまた不思議なことに、描いているとまるでその場にいるような錯覚に陥るのだった。



夕日はあっという間に沈んだ。本来なら背後の箱根山塊に沈むはずだが、江の島のところだけ稜線が切れていて、江の島の島影に直接沈んでいった。



「昼と夜の挟間(はざま)」というのは、一瞬で終わる。太陽が姿を消すと、逆光で見えなかった富士山のシルエットも見えるようになってきた。江の島の島影に飛び出している構造物は、「江の島シーキャンドル」と呼ばれる観光施設である。同時に「江の島灯台」としても活躍している。